

世界史における日本の植民地支配

神奈川県工業高等学校 中山拓憲
鎌倉学園高等学校 神田基成

はじめに

次期学習指導要領から「歴史総合」（仮称）という科目が新設される。これは、「自国のこと、グローバルなことが影響しあったり、つながったりする歴史の諸相を学ぶ科目」とされている。文部科学省のワーキンググループの資料でも「日本の動向と世界の動きを関連付けて捉える」という考え方が示され、「世界史 A」と「日本史 A」を関連付ける図が示されている。今回、私たちは世界史教員の立場から日本史へと接近するという観点で、「世界史における日本の植民地支配」というテーマを設定した。

そもそも、現在の高等学校における学習内容には、世界史で「帝国主義の時代」、日本史で「アジアへの拡大」と、双方に植民地支配について扱う単元がある。それにもかかわらず、授業の現場においては取り扱いに慎重になるあまり、腫れ物にでもさわるように、あるいは「公正さ」を優先するあまり、当たり障りのない行政組織や統治政策などを教えることに終始してしまっていた。

とりわけ世界史における自己の実践を省みると、欧米諸国の帝国主義的拡大とそれに伴う植民地支配は教えても、日本による台湾支配や朝鮮支配などはきわめて浅薄な内容でしか扱っていなかった。しかし、世界史と日本史との連携を求める声が大きくなり、さらには「歴史総合」の新設が決定的となった今、日本によるアジアの植民地支配を世界史の文脈に位置づけることは、意味のあることなのではないかと考えた。

第 1 部 植民地台湾における女性のファッションがもつ政治性

鎌倉学園高等学校 神田 基成

1 帝国主義のなかの「台湾進出」

日本による帝国主義的拡大は世界史のなかにどのように位置づけることができるだろうか。19 世紀までに西欧各国はアジアに進出し、それぞれに植民地経営に乗り出していた。近代国家になったばかりの日本にとって、そのお手本のような国がイギリスであった。この流れに 19 世紀末になって日本も乗れるようになり、日清戦争の結果として台湾を領有するに至ったのである。台湾は日本帝国にとっての最初の海外領土であった。ここまでの国レベルの政治史、言い換えるならば「大きな物語」は、現行の教科書でもたどることができ、脚注の内容も含めれば統治の構造も学習することができる。しかし、民衆の生活、個人レベルでの「小さな物語」となると、教科書の内容からは見えてこない。

台湾が日本の植民地になったことで、台湾社会にどのような変容がおこったのか。人々の生活は、どのようになっていったのかということにも目を向けるべきである。台湾領有の経過と統治の概要は以下のとおりである。

まず、朝鮮半島における利益で日本と清朝は対立の度合いを強め、日清戦争が勃発した。そして結ばれた下関条約では、朝鮮の独立を確認するとともに、遼東半島・台湾といった海外領土を獲得することになった。しかし、日本の大陸進出を警戒するドイツ・ロシア・フランスの三国干渉によって、遼東半島という大陸領土を直接に支配するもくろみは失敗に終わった。そのため、日本は台湾経営に注力していくことになったのである。

日本帝国による台湾の統治は、その最初から難しい問題に直面していた。漢族系住民の組織的な抵抗は、長期化することなく平定したが、山地を中心に居住する原住民の抵抗には、何年も悩まされた。また、南国特有の病気マラリアにも苦しめられた。これが山間部平定が遅れた一因である。



図 1 タイヤル族の女性

統治をスムーズに行うため、旧慣調査と呼ばれる事業を行い、日本が台湾を領有する前の民衆生活や文化の実情を調査するとともに、土地調査事業を実施して、近代的な土地所有権の確定、租税制度の整備、主要都市の都市計画、インフラ整備などを進めていった。このような近代的な制度の導入によって、台湾住民の生活環境は大きく変わっていった。

2 日本による台湾統治の教材化～生活の視点から～

(1) 台湾社会の人的多様性

日本によって支配されることになった台湾の人々の生活には、いったいどのような変容がみられたのであろうか。衣食住は、しばしば世界史という科目においても教材のテーマとされる場所である。ここでは、植民地台湾における女性のファッションがもつ政治性をテーマとして取り上げてみたい。

そもそも台湾に住んでいる人々といっても一様ではない。台湾社会は古来より人的に多様であった。時系列の順に挙げれば、まずは先史以来台湾島に広く分布したマレー=ポリネシア系の原住民である。のちに日本によって「高砂族」とも呼ばれたこれらの部族は、日本の統治下で6部族に分類されていた。彼らは中国文化のアイデンティティをもたず、部族ごとの共同体意識も強い、誇り高い人々である。つぎに漢族系の本島人である。清朝による台湾平定以前から平野部に居住した大陸由来の住民に、清朝以降に渡ってきた人々を加えた中国文化にアイデンティティをもつ人々である。そして欧米人である。すでに16世紀以来の海外進出のなかで、台湾に来航したヨーロッパ人はポルトガル、スペイン、オランダと多数いた歴史的事実はある。しかし、ここでいう欧米人とは、19世紀以降にキリスト教の宣教目的で渡来した人々が中心であるため、おもにキリスト教にアイデンティティをもつ。最後に、日本人である。彼らは、日本の台湾領有開始とともに、官民挙げて組織的に台湾に移住した人々である。



図 2 タイヤル出身の警察官男性と和服を着たその妻

(2) 台湾における和服着用のひろがりと政治的意味

日本人の台湾移住は、現地の生活文化にどのような変化をもたらしたのだろうか。その第一の例が和服の流入である。ここでタイヤル族(図1)における事例をみてみたい。当初、日本人と台湾先住民との間には直接の接触はほとんどなかったが、直接統治が可能となった1914年以降、台湾先住民との「平和」的な関係が構築され、「蕃界」あるいは「蕃社」と呼ばれた先住民の居住地における衣食住全般に変化が現れる。そうした日本文化の浸透に大きな役割を果たしたのが、「蕃社」に設置された駐在所に常在した警察官とその家族であった。

駐在警察官の妻は、和服に身を包んだ「奥さん」として家事をこなすものの、先住民の女性とは違ってつらい野良仕事はしない。いわば警察官一家は、台湾先住民にとって近代化された家族の象徴でもあった。そんなスタイルを享受する先住民夫婦もあらわれ、1920年代になると先住民たちが着用する衣類に多様性が出てくる(図2)。こうして、女性の和服のジェンダー化がすすむことになったが、

先住民女性の和服着用については賛否の両論がみられた。「先住民なのに日本人みたい」というような肯定的な意見があったのに対して、衣類とは本来的にその土地の風土に適して形成されたものでもあり、「台湾という土地で先住民が日本の和服を着用するというのは適していない」というような否定的な意見が台湾先住民のなかでもみられたのである。

台湾先住民が和服を着用した背景には、統治側からの指導があったことも事実である。総督府は、帝国臣民の「正しい」身体としての和服の着用を駐在警察官を通じて指導していた。しかし、こうした指導にも 1937 年以降、戦争の影響がみえるようになる。台湾人（先住民と漢族系住民）が和服を着用することは、ゆき過ぎた「同化」であると批判されるようになるのである。ここには和服を着用する時局に非協力的な生活をするのではなく、モンペを着用して時局に協力的な生活をする指導への転換があった。

（3）台湾における洋服着用のひろがりと政治的意味（本島人の場合）

それでは第二の例として、漢族系の本島人に注目して洋服の普及についてみてみたい。まず、「皇民化運動」が始まる以前の 1920 年代末～30 年代において、台湾においてもモダンガールが登場した。「新女性」（台湾人エリート層の女性たち）が担い手であったモダンガール現象において、彼女達は消費者としての台湾人女性であり、上海と東京を流行の発信地とみていた。そもそもチャイナドレス（図 3）は本島人の伝統衣装ではないが、日本人からすると民族識別の記号でもあった。そのため、1936 年頃に始まる「皇民化運動」以降は、チャイナドレスに対する政治的暴力やファッション選択への抑圧が行われた。漢族系の本島人にとって、和服は式服として位置づけられていた。それは、日本人からの視線が想定されたからである。日本本土に留学経験もあり、帰台後は美術の教師となった陳進（図 4）という女性は、式典などでは和服で登場したが、私的な場面では洋服で生活したという。

1940 年代初頭の都市部では台湾人（本島人）女性の過半数が洋装であったという観察報告や所持服についての統計（図 5）もある。「着こなしが、だらしない」といわれてしまいう着付けの難しさなどから、ファッションとしての和服には消極的であり、また和服がもつ文化的・政治的記号性ゆえに着用が敬遠された。また、洋服の着用には別の意味も見いだせる。日本による台湾領有以前から、欧米の教会活動の影響で洋服文化が身近だったこと、そして洋服を着用することで、「和服の日本人に支配される伝統服の台湾人」という支配関係の「超克」を意図したといえることができる。

（4）植民地台湾に生きるということ

植民地台湾に生きる人々は、多様な民族で構成されていたため、植民地支配を積極的・主体的に受容した人々もいた一方で、消極的にしか受容しなかった人々もいた。イギリス型の植民地統治モデルに固執せず、イギリス・フランス・アメリカが植民地で行っていた様々な要素を取り込みアレンジされた日本型植民地支配の特徴の一つは、台湾の地理的・文化的・民族的な近接性もあって、支配構造が曖昧化されたことが挙げられる。これは被支



図 3 モダン化されたツーピースのチャイナドレス



図 4 作品展入選時の陳進

配者たちの行動にも影響を与えた。とりわけ衣服の選択というファッションを通じて、彼らは「近代」に近づこうとしたといえる。しかし、そこには西欧諸国がもたらした「近代」と、日本がもたらした「近代」という2つの「近代」が存在していたのである。それら「近代」の要素を、自らの立場で選択的に取り入れた台湾の住民達は、「日本支配にべったりと付き従う」あるいは「頑強に抵抗する」、というような二者択一ではない行動をとった。とくに女性のファッションからは、外部から持ち込まれた制度や文化のなかでたくましく生活した姿が浮き彫りになる。

3 まとめ

本発表は、植民地支配を正当化するものでなければ、日本統治時代の歴史を全否定するものでもない。ただ、韓国ほど「モノを言わない」台湾の過去において、日本がどのような支配をしてきたか、冷静に客観的事象を中心に提示し、分析する姿勢で授業を考えたつもりである。もとより、植民地支配に関する実践は、困難を伴うものであろう。それは、扱おうとする事項の多くが依然として過去のものではなく、現在も未だ解決されない負の感情に覆われているからにはほかならない。そうした感情を抱えている方々に真摯に向き合うことは、絶対に必要であり、忘れてはならないだろう。一方で、近年の学術諸分野における研究の進展を踏まえた実践も検討する余地が十二分にある。今回は、感情的ではない教材化を心がけた。そして、民衆レベルの視点でテーマを設定し、素材を選び、事実から分析できる工夫を誰でもできるよう、今後も、「人の顔がみえる植民地時代学習」を追求していきたい。

	柴町	大稲埕	合計	
洋服	9	52	61	
和服	1	0	1	
本島服	8*1	31*2	39*3	
合計	18	83	101	
	女		男	
	若い女	中年以上	若い男	中年以上
国民服標準服	1	0	35	39
洋服	583	100	158	279
和服	12	19	8	33
本島服	170	553	50	273
シャツとズボン			583	263
合計	766	672	834	887

図5 台北市内での服装観察

《参考文献》

- 洪郁如「植民地台湾の「モダンガール」現象とファッションの政治化」、伊藤るり他編『モダンガールと植民地的近代—東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー』岩波書店 2010
- 黄昭堂『台湾総督府』(歴史新書〈日本史〉147)教育社 1981
- 中西美貴「日本統治下の北部台湾における先住民女性と和服—タイヤル族を中心に」『女性学年報 第29号』日本女性学研究会 2008
- 原田敬一『日清・日露戦争(岩波新書 日本近現代史③)』岩波書店 2007
- マーク・ピーティ『植民地 20世紀日本 帝国50年の興亡』慈学社 2012

第2部 日記を通じて見る植民地下朝鮮人の日常

神奈川県工業高等学校 中山 拓憲

1、帝国主義化の植民地朝鮮

植民地研究においては、一つの事実に対する解釈の違いによって感情的な議論が生まれているように感じる。それを乗り越えるために、両者が納得のいく「事実」の積み重ねが大切だと感じる。そこで今回の報告では、植民地化の人々の日常に注目したいと考えた。朝鮮パートでは、歴史上に名前が出てこないような人の日記を通して、当時の朝鮮人の生活を見てみたいと考えた。

今回取り上げた資料は、大邱公立高等普通女学校の朝鮮人女子生徒が書いて日本人である担任に提出していたものである。こういう状況であれば女子生徒が本音をすべて書いたとは考えづらい。ただし日朝両国の人々の目を通っているという点ではある程度の中立性はあると考えられる。ただ一方で、高等普通学校に通う女子生徒というのは植民地期を通じて人口の1%に満たなかったものであり、その点で特殊な状況であったということも忘れてはいけない。

2、朝鮮人女学生Kさんと植民地朝鮮

第一次世界大戦以降、列強と歩調を合わせようとしていたかに見えた日本が独自の政策を取り始めるのは1929年の世界恐慌、1931年の満州事変以降であるが、朝鮮半島では1936年に南次郎が総督に就任すると、総力戦に備えて朝鮮人に対する同化政策である「皇民化」政策を加速させていく。なかでも、1937年2月に「朝鮮人民の人心安定は教育にあり」と語ったり、1937年に教育現場での日本語使用の徹底を図ったり、1938年には第3次教育令で日本人と朝鮮人の共学化を測り、正課であった朝鮮語を随意科目としたりと、特に教育政策に力を入れた。Kさんはまさしくそのような時代に学校に通っていたのであり、植民地政策の最前線と言ってもいい場所にいた。

またKさんが住んでいた都市大邱は、日本人が人口の25%を占め、陸軍の歩兵第80連隊が駐屯していた。Kさんの通った大邱公立普通女子高等学校（大邱普高）も教員が17名中11名が日本人であり、朝鮮が日本の支配下にあることを身近に感じる場所にKさんは住んでいたと言ってよい。

その中でKさんがどのような学校生活を送っていたかと言えば、1日6時間の授業を受け、放課後や日曜日、夏休みもほぼ毎日部活（バレーボール部）のため登校といった忙しい日常を送っていた。

その中で学校側は生徒に「良妻賢母」になることが求め、さらには「皇国臣民」になることも求めた。日中戦争前は前者に重きが置かれていたが、戦争開始後は後者に重心が移った。その中で、国語常用する目的で日記の提出が強制された。校長、教師の訓話を書き写すことで訓話の内容を自覚することと、日記を提出することで日々の生活を監視する目的があった。Kさんより一つ学年が上の洪慶姫さんによる戦後の回想では「教務室の先生たちの机の前には、常に何人かの学生たちが泣きながら立っているのが普通の光景だった。学生たちの日記を毎日担任の先生が検閲し、これを読んで、その時々学生たちの勉強および言動すべてを観察し、教務室に呼び出して訓戒をしていたためである。その訓戒は、いつも涙を見せずには終わらない厳しいものだった。」と書かれている。Kさんの日記を見ると、全ての生徒が「涙を見せずには終わらない」ものだったかはわからないが、生徒への圧力となっていたのは間違いないだろう。そういった状況下で書かれた日記である。

3、日記を通してみる女学生の日常

それでは実際にKさんの日記を見てみよう。今回の報告では、内地（日本）への修学旅行、日中戦争の開始、兵士の見送りについて書かれた日記を取り上げる。まずは修学旅行についてみていこう。

目的；10月22日の日記より。校長より「主点は皇大神宮（伊勢神宮）の参拝」であり、「時局に際し国威の栄えと武運長久と私共各自のことをお祈りするのが一番大切な点」だと訓話があった。
Kさんの反応1；10月26日 伊勢の皇大神宮を参拝しまして、皇位の栄へません事と皇軍の武運長久を祈りまして、大麻（伊勢神宮の御札）を奉戴してまゐりました。
Kさんの反応2；10月24日 本当になれない阪急デパートの昼食でも皆はすぐにかかりました。本当に夢のパラダイスか現（うつつ）のパラダイスか知らぬ宝塚を見学して後は、あの子供の世界や動物園や植物園には目も回る程でした。

Kさんは1937年10月23日から30日まで内地へ修学旅行に行った。行先は下関から入って関西方面へ行き、京都や伊勢神宮にも行くという内容である。日中戦争が本格化している時期に旅行に行っているのが興味深い。いまだ「銃後」の生活にまでは影響が及んでいなかったから行けたのであろう。ただその一方で、この旅行は南次郎の「皇民化政策」の一環として行われたと考えられる。つまり「皇国臣民」を生み出すための旅行ともいえる。

10月22日の日記を見ると、校長の訓話が記されており、伊勢神宮の参拝こそが旅行の「主点」と語られている。それに対してのKさんの反応はどうであろうか。10月26日の日記を見る限りは、校長の考えを受け入れているようにも感じる。ただし22日と26日の2日間の日記を見比べると、ほぼ文面が同じである。日本人の担任に検閲されるものだからこそ、校長の言う通り書くが、内容は書き写しに近い。しかも感想が何も書いていない。それに対して10月24日の日記における、宝塚に対する感想は「夢のパラダイスか現のパラダイスか知らぬ」と書いており興奮を隠せない様子が伝わってくる。ここから、Kさんが伊勢神宮の参拝を嫌がっているとは言わないまでも、積極的ではない様子が伝わってくる。

次は日中戦争直後の学校の様子について書かれた部分を見てみよう。

7月14日 「友達からの騒ぎは戦争と言うことをずいぶん気にするやうでした。」
7月15日 「今日も学校の校舎内に入ると何だか騒々しくてたまらないほどでした。こうなるとやはり先生方からも授業中或は放課後等にもお話がありました。やはり違うと思はれ、また悲しい気がしたり、或る先生に対してはなつかしさが深くなりました。」
7月16日 「勇ましき兵隊さん共は御国のために死ぬることを知つて行く、それでその兵隊さんを無事にと祈つて熱烈燃ゆる如き我が日本帝国の国旗を振りまはして奉祝しました。」

日中戦争の開始で学校が落ち着かない様子が日記からわかる。その中で、7月15日の日記ではKさんは「やはり違うと思われ、また悲しい気がしたり」と書いており、教師の言葉に対する違和感や、戦争に対して否定的な気持ちを書いている。7月16日の日記では、「死ぬることを知つて行く」兵士に対し「無事にと祈る」一方で、「我が日本帝国の国旗を振りまはして奉祝し」たりと、戦争の犠牲にならないでほしいという気持ちと、戦争に行くことを祝福する、反する内容が日記に記されている。Kさんの複雑な思いが伝わってくる。同時に、こういった内容を学校に提出していたということも注目しておきたい。

最後は兵士の見送りについての日記を見てみよう。朝鮮人兵士が日中戦争に参戦するのは1938年

なので、この時点で兵士の見送りというのは日本人兵の見送りである。

9月2日(木) 「午後は(兵士の見送りのために) 駅へ出るのでしたが病気のために国民としてはあるいは本国生徒として務めを果たされないことに残念でたまりませんでした。」

8月4日(水) 「運動(バレーボール) 後には時間の関係で兵隊を見送りにいけませんでした。」

8月6日(金) 「今日は8時まで登校しましたが、3年は誰もおりませんでした。そこでどうしたわけだろうと思ひましたが、後に知ると兵隊さんの歓送にいつたやうでした。私達4年梅(の見送り)は何時でせうと疑問でした。そのときに通知を見ますと、もはや時間が遅いでした。」

8月7日(土) 「今日は運動に行きましたが、誰もおらないのでどうしたのでせうと思ひましたが、後に知ると、それは午前の兵隊見送りに行って来たさうでした。」

9月2日の日記を見る限りは、兵士の見送りに行けなかったことに対し「本国生徒」という言葉まで使って「残念な気持ち」が記されている。しかし8月4日から7日の4日間に関して注目すると、4日のうち3日も行っていない。しかも8月7日の日記を見る限り、他の生徒は行っていることが分かる。ここから兵士の見送りに消極的だったことがうかがわれる。その理由としては、戦争に対して悲しく思ってしまう祝うことができないというKさんの気持ちが日中戦争開始時の部分から推測できる。

4、高校生の意見

「Kさんにとって大邱公立高等普通学校の教育や学校生活はどの様なものだったかを考えて書け。」という問題に、Kさんの日記を読ませた上で生徒に取り組みさせた。

Kさんの生活は、学校からいろいろ束縛をされ「不自由」だと答えた生徒もいれば、自分の意志でKさんが行動している部分をとらえて「自由」だと書いている生徒もいた。学校をやりたくもないことをやる場所をとらえる生徒もいれば、勉強できたり仲間に出会えたりする場所をとらえる生徒もいた。生徒によって様々な意見が出てきた。それらを掲載したプリントを作成して生徒に配ったので、生徒は多様な意見に触れることができたと思う。現代の生徒が多様な考えを持ったように、当時のKさん自身も様々な考えを持っていたのではないのではないだろうかと思う。Kさんの置かれた状況は、Kさんにとって一面的に評価ものではなく複雑であったと考えられる。その一面を見るのではなく、様々な側面から植民地をとらえ、その複雑さに寄り添うことが植民地を正しくとらえる一歩につながるのではないかと考える。

5、まとめ

Kさんは朝鮮の植民地化によって生活苦に陥った層ではない。そういった不満は日記からは感じられない。しかし日本人教師の監視下で総督府の「皇民化」政策を真っ先に受ける立場にあった。日記を見る限り、そこでKさんは教師に真っ向から逆らうことはしない。学校から書くことを指示されていた日記も、母国語ではない日本語で毎日書いていた。日本語で書くことの大変さも日記には記されているが、それでも毎日書き続ける。さらに言えば京城師範学校への進学も望んでおり(目標は叶わなかったが)、決して学校教育自体に対して否定的な気持ちを抱いていたわけでもなかった。しかしすべての教育を受け入れていたわけではなかった。それは日記にも現れている。真正面から反抗的な事を書くわけではないが、書きたくない「感想」は学校側が望んでいても書かない。兵士の見送りのように、やりたくないであろうことは理由をつけて逃れようとしている。朝鮮を大陸兵站地である朝鮮の協力は日本にとって不可欠であった。そのことが「皇民化」政策を加速させていった。そういった

状況下でも自分の意志をもって行動していると考えられるのである。

今回、Kさんの日記を通して、教科書には載らない朝鮮人の日常に光を当てようと考えた。そして、その一端は見る事ができたと考える。ただし、前述したとおり日記は資料としての限界を当然持っている。いずれ機会があれば、一つの日記だけでなく複数の日記を用いつつ、日記以外の資料も用いて、より客観的に当時の朝鮮人の状況を見ていきたいと考えている。

[主要参考文献・論文]

太田修「戦時期大邱の朝鮮人女子学生の学校生活—1937年の日記から—」『植民地朝鮮の日常を問う—第2回佛教大学・東國大学校共同研究(佛教大学国際学術研究叢書』(佛教大学国際交流センター) 2013年

水野直樹、庵途由香他編著『図録 植民地朝鮮に生きる』(岩波書店) 2012年

板垣竜太『朝鮮近代の歴史民俗誌 慶北尚州の植民地経験』(明石書店) 2008年

趙景達編『植民地朝鮮』(東京堂出版) 2011年

趙景達『植民地朝鮮と日本』(岩波書店) 2013年

国立歴史民俗博物館編『「韓国併合」100年を問う』岩波書店(2011年)

板垣竜太「植民地の憂鬱—農村青年の再び見出された世界」『植民地近代の視座 朝鮮と日本』宮嶋博史ほか編(岩波書店) 2004年

板垣竜太「故郷の夢—在京都朝鮮人留生日記(1940年~43年)にみる植民地経験—」『コリア研究 第4号』(立命館大学コリア研究センター) 2013年

梶居佳広『「植民地」支配の史的研究』(法律文化社) 2006年

辛島昇編『世界各国史7 南アジア史』(山川出版社) 2004年

おわりに

世界史の上に日本の植民地支配をおいてみることで、日本の植民地の独自性が見えてくると我々2名の発表者は考えた。イギリスでは、第一次世界大戦にインド人を参戦させるために、自治を約束した。第二次大戦時にはインドはパンジャブ州と、ベンガル州以外は戦争に協力しなかった。それはチャーチルが大西洋憲章に記された「自由を奪われた人々は自由を回復すること」という文言は、インド人には適用されないと断ったからだ。つまりインド人にとっては自由を得ることこそが、インド人の闘う理由であった。それと比較すると「皇民化」政策で忠良な「日本人」を作り、「日本人」だから日本の戦争に協力させるという日本の方法は、相当に困難であるように思える。確かにすべての植民地住民が日本の植民地支配に対して強硬に反抗したわけではない。ただし今回の発表にあるように、日本側がのぞむように台湾人・朝鮮人が、心の底まで「日本人」になった訳ではなく、彼らはそれぞれに自分の意思を持って、可能な範囲内ではあるが取捨選択を行って行動していた。日本植民地の独自性についての研究は今後も進めていきたい。

また第二次世界大戦の戦勝国であったイギリスは、インドの独立は、自分たちが育てた知識人層に権力を移譲してやったという考え方をしている人が少なくないという。欧米において侵略行為と異なり、植民地が「悪」であるという意識や、植民地支配によって生まれた弊害に対する責任が元宗主国にあるという意識も薄いと聞く。当発表のような、植民地下での日常生活に関するような研究はなおさら少ないと考えられる。日本の植民地研究の蓄積は相当な量に達する。今回のような日本の植民地に関する研究が、世界史における植民地研究に貢献する部分は少なくないと思う。